土屋正義編輯

繒本石山軍記

第二編

一

特14遠へ
2269
11

内へ送付
第2269
巻1

繪本石山軍記弐編

孫市一子 豊人

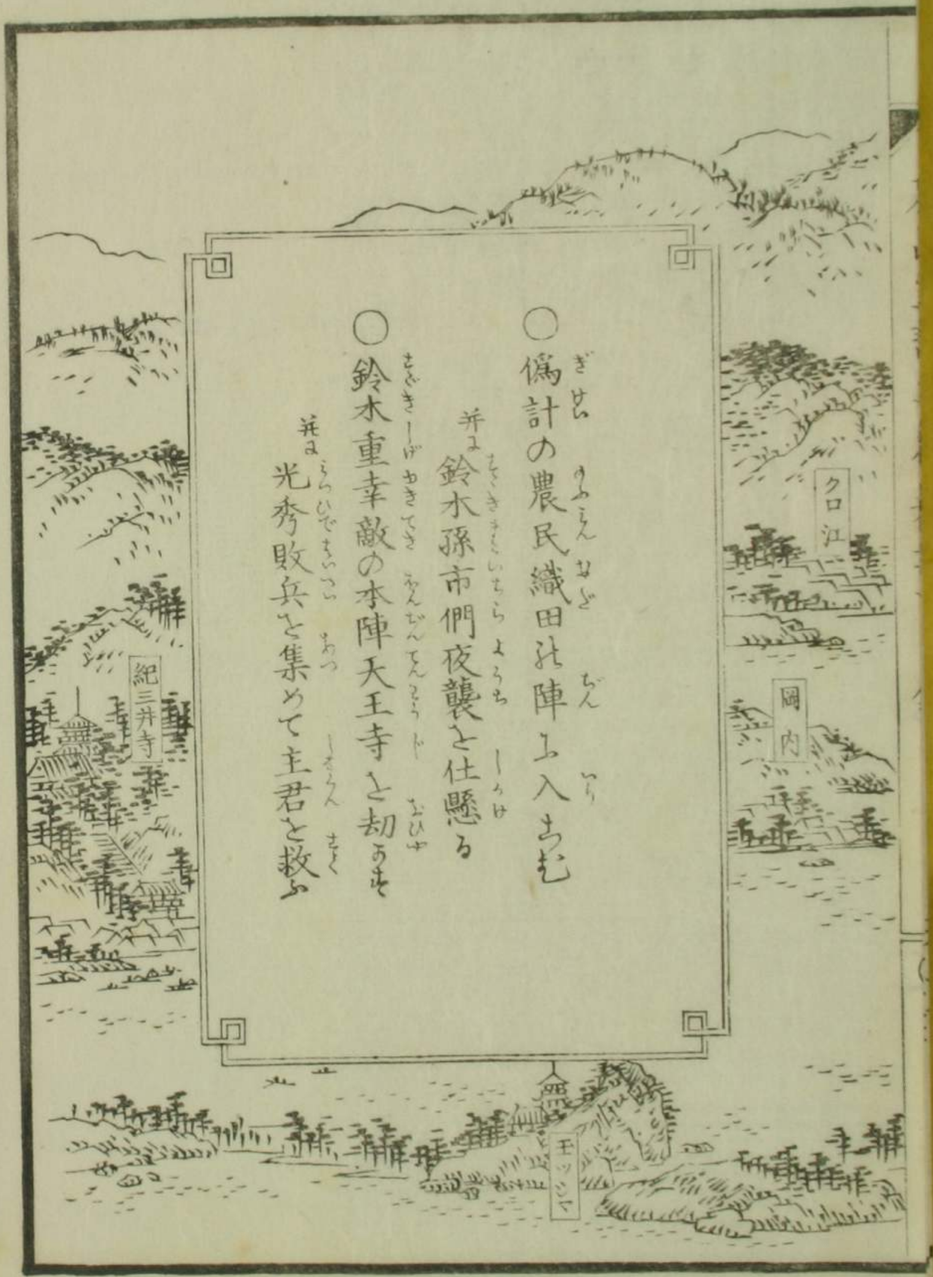
鈴木孫市郎良固
南無不可思議
前

浅井備前守長政

長政之室　小谷ノ方

繪本石山軍記第二編卷之一目録

○野田福嶋に據て三好織田に敵ひ
并に信長龍の岸よ砦を築く
○鈴木重幸石山本願寺え入城
并に初度織田勢と秘策に懸合



○偽計の農民織田社陣ヶ入ち也
　并ニ鈴木孫市們夜襲を仕懸る

○鈴木重幸敵の本陣天王寺を刼ち
　并ニ光秀敗兵を集めて主君を救ふ

繪本石山軍記第二編巻之一

土屋正義　編輯

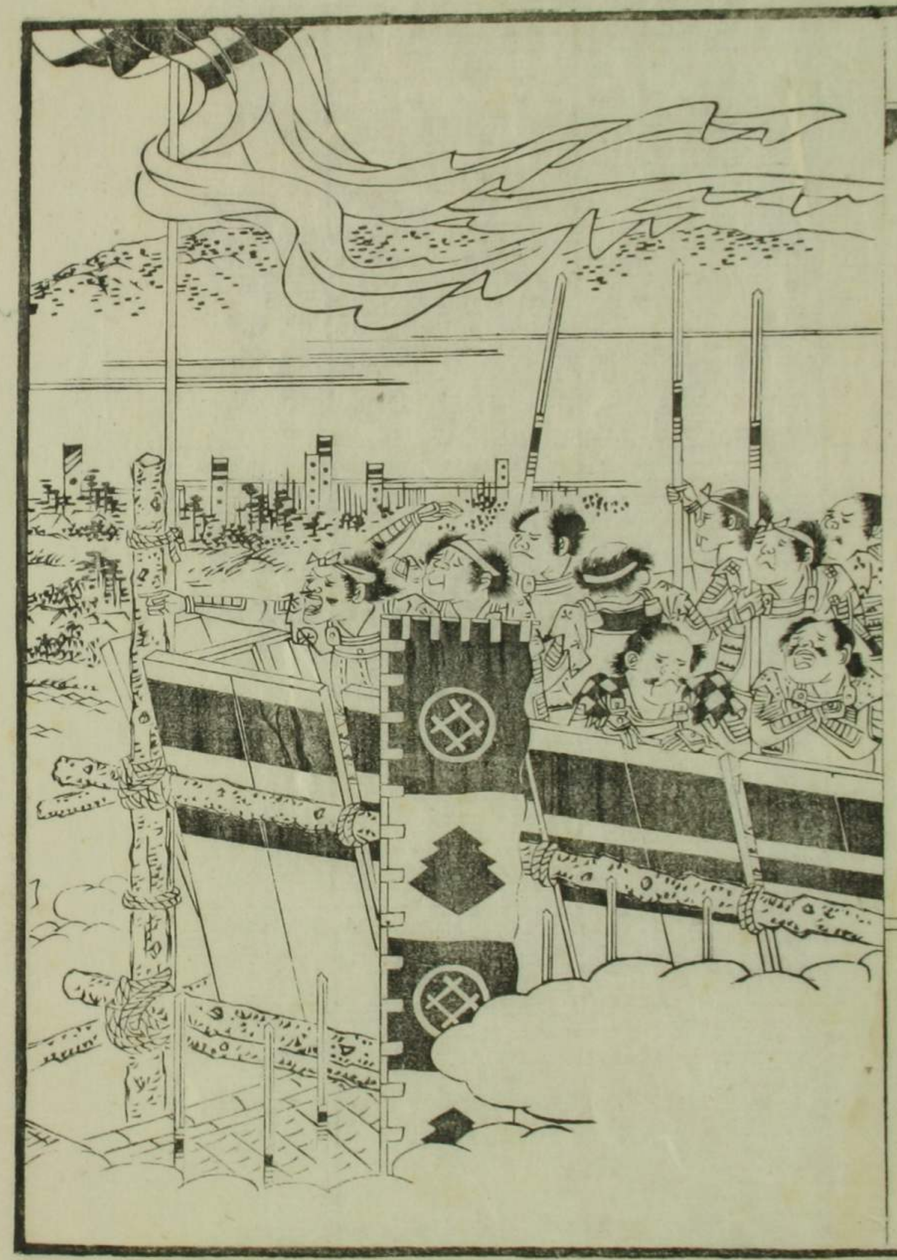
○野田福島に據て三好織田に敵を并ニ信長篭の岸に砦を築く時に元亀元年庚午正月三日の綷ゝるゞ夕景の刺ち西北の天に當り白氣を噴出を星現ハを皆氣長ハ伸て光去を依之京地に住る輩ハ連年戰亂の巷に懲て該星の出現那の兆ゝやと僉々太く怪〳〵ゝる処中にも古老の人の謂々ゝ様ハ世界に人の殖る則ハ天理に逆ふ非義多く〳〵て慾念乃炎天地に充竟ふ五常の大道を亂すに到る則ち是終羅道乃澁觴ゝ該星ハ昔より言傳ふ彗星ゝ夫人多き則ハ天に克つ天定ゝ人と征そと謂彗星現ゝる年に臨めゞ專ら戰爭火災流病を主り世の〻華と成綷ゝ

唯恐き慎しむに如ざるべし左傳に曰く彗星と号るハ天地の間乃節ゝ
象り舊きを革め新くるを元來地氣乃乾燥乃氣を以て日乃光を受て
ゐる故に夕ハ東にさし曉ハ西にさす乾燥乃氣乃迫る処より火災戰亂甚
しきを全体星より低きゆへ疾く消降すと謂り天乃示現管を凶
兆ゐらん噫恐るべし〳〵と喻し〳〵それ聽者眉を顰めて危踏々る然る処に三
好の一黨ハ去年四國路へ敗走し一つ時を窺ひ居りけるゞ頃日淺井朝倉
の兩家ハ織田と合戰最中と聽より人虛に乘ハ該期へと三好目向守義興同
く下野守政康岩成主税介慶之等の三人衆を始めとして四國の一族殘
黨と談合京攝へ攻登らんと軍評を此時三好義興專一々ゐハ俺們遠國
を渡海ゐして京攝に攻登ゐ縡容易らぬを最も畿内悉く敵地と成一向脚

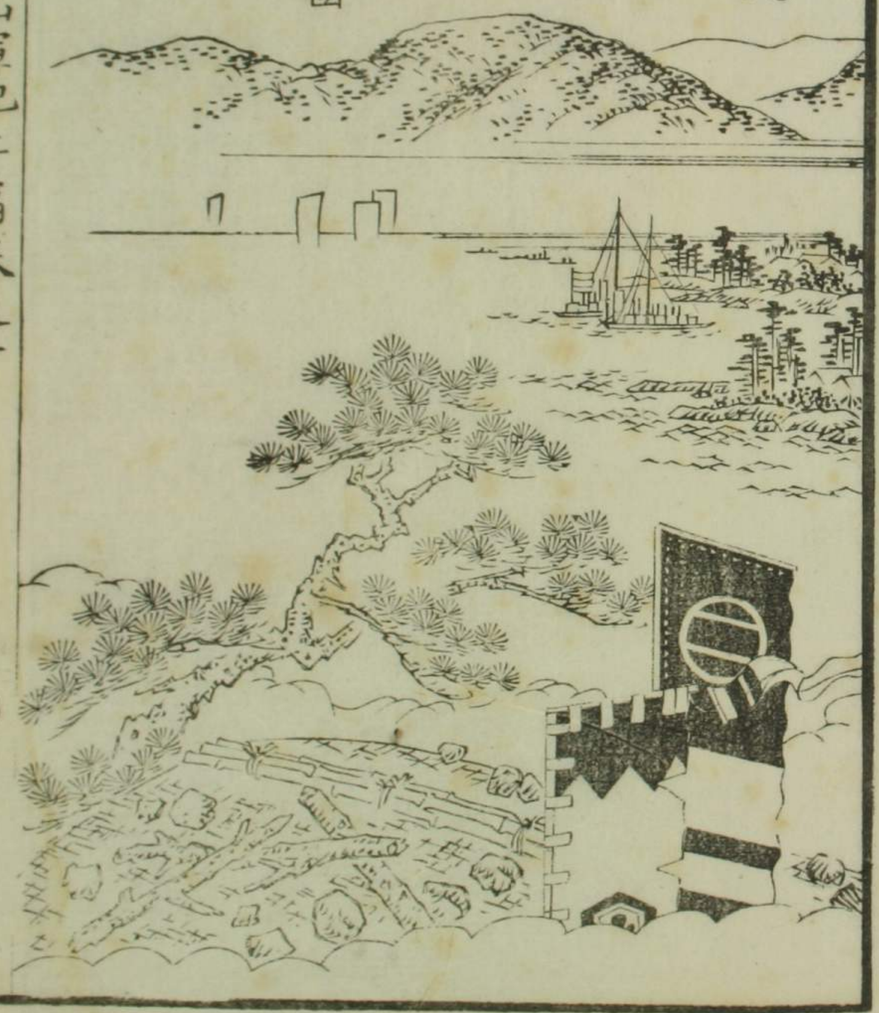
を留へき処もなく謂に敗走乃度毎に臨み該四國路まで迯歸る實に迂遠
始末ゐらぬを斯てハ不都合云様もあらぬ到底ハ勝利を得難し依て攝州
の地にて要害を搆へ則ち之を根城とゐして京地の動揺を窺ひ看て進退
企圖を外さゞりせバ四國ゟ居より百倍利方く加之石山顯如上人ハ年來信長
と不平の赴き之に依頼し味方とゐさバ那首に在城中糧米逮び軍費要
金等缺乏き殊に俺們攻登ゐ則ハ淺井朝倉愈時宜得て信長を討んと
競ふべし信長隔邦に敵兵起らハ頓ゟ慌忙ゐさハ必定く然るに先要害の地
にハ攝州野田福嶌の地こそ最究竟乃場所と思へり前へ大沼廣く横ゝり
馬の駈引自由に任せ後ハ南ハ殿川の流れ地を巡り西ハ大海を扣て通船
便ゝく速く那首に進向して急き要害を築造せんにハ信長江越兩國

取合の最中即刻京攝へ來るまじく倘万一進發に逮ぶぞあらば此方淺井朝倉と牒し合せ狹き討にせんへ奈何と云へ岩成篠原松山等之を聽大きに感じて該議尤も妙計へとて一味同意の尓衆人に細川六郎氏元松山藏人久清三好康長入道笑岩篠原右近進安宅甚太郎以下の的們總勢二万三千餘騎元亀元年七月廿七日攝州稗島に押渡り大仁村に旅陣を把て野田福嶌に隍を穿廻し塀を懸矢櫓を上乱掀鹿角木を植て楯篭り而して本願寺へ使節を立扶助同盟乃儀を憑まれば上人答へて曰ふ樣へ兵糧扶助の綽へ兼知仕る併一味同盟へ断り候ふとある三好方に之を聽て本願寺味方を断るとも糧米惠を遮與らるべく篭居の儲け安堵へとて勢強く篭り名れば攝津の騒動大方々々を早騎の注進岐阜に馳て信長乃

出馬を促しける信長斯と聞し召まし淺井朝倉の押へを堅め攝津進發の陣觸し給ひ濃尾參勢近江の軍兵許多催促あるに凡三万五千余人着到を同年八月廿日岐阜出陣廿四日に入京し給ひ先征夷府乃御營黍殿し三好ら黨征伐言上有て征夷へも御出馬乃儀を禀し勧め直ちに信長洛と退き攝津國さして發向し給ひ本陣を四天王寺に居給ふ先鋒乃軍兵へ渡邊津村上下難波木津今宮に充滿を侍て味方に蜀從を武士に畠山治郎高政三好左京太夫義継松永彈正久秀和田伊賀守惟政池田筑後守勝政伊丹兵庫頭親興鹽川伯耆守國滿茨木佐渡守と始めとして追々に諸將着到さるに其勢都合六万余騎と云何さ為信長該大兵を以て野田福嶌を取圍さるべ三好の篭兵一悠りもなく敗軍せん綽



三好が徒
攝州野
田福島ゑ
砦と築
て信長
ゑ敵對
ゐる
圖



眼前あらんと看る的片唾を呑で危踏々る然バ福嶋ふ揖籠りゝる三好
爲三香西越後守ハ尓躬籏大将にてあるゝ織田乃猛勢に氣後れて
暗に城を脱出織田に降ゝ同く九月七日信長陣替有て天満乃杜に移陣
ありて下川分口と云に對城を築き平手監物佐々成政塚本小大膳佐
藤六左衛門等千三百人の兵を籠て之を守らせ亦本願寺より十餘町西な
る篭の岸と称ふ地にも一層の砦を築きて齋藤新五郎中川八郎右衛門稻
葉伊豫守に士卒千五百人を差添籠居せしむ是ハ倘石山本願寺よりして
三好に援兵做もせんゝと其押への爲置れしなり之已に手配十分ふ調ひ々れバ
織田方の寄手の兵士們野田福嶋へ攻寄つゝ埋草と以て總隍を埋さ中
津川に橋を架し芝土堤を築きて仕寄を附透間あらせぞ詰寄ゝる去

程に征夷義昭公ハ九月十二日京都御發駕あり征夷供奉の衆人ハ上
野中務大輔同く佐渡守大舘治部大輔京極近江守大草治部大輔三
淵大和守牧嶌孫六野瀬丹波守飯川山城守同く肥後守小林民部少
輔曾我兵庫頭仁木伊賀守沼田弥十郎二階堂駿河守宇野弥七郎神
野加賀守丹地太郎兵衛尉尓勢総て七千余騎とゝ攝津西成郡浦江
と云る地ふ嚮に細川高國乃築きゝる古城の在に入御し給ふ彼細川
高國と云ハ一族細川澄元と合戰し竟に去負没落せし不吉の古城ゝて
在しゝハ三好の者們斯と看るゝり偖ハ征夷不吉城に入るゝハ味方に把
てハ勝利の幸端ゝ浦江の城ふ篭り乙者の軍に勝々る例と聽ぎ管ぞ該
闘戰利運有とて衆々勇ミ挙つて歓びゝり

因に曰く西成郡北浦江邑に字を城乃裏と謂る地あり是正しく古城乃跡なるべし亦この城の裏乃傍に勝樂寺と云る佛刹あり古老の曰く是三好修理大夫長慶の香華院なりしと以て仝山号を長慶山と云ふ最も今八黄檗派乃禪刹なれど仝開宗の事實詳らかなる攝州志に曰く大般若經一百五十五跋云兼久三年三月廿七日安置摂津國天王寺御領西成郡鷺嶌莊浦江村勝樂寺云々然バ新しき寺院に非ず

○鈴木重幸石山本願寺へ入城并ニ初度織田勢を秘策に懸る

然程に信長の大軍寄挙て野田福島の城を打圍ふ所々に井楼を組上城中を看積屢大炮を放つて攻立々れバ城中の舍屋微塵に碎くを百雷撥け墮るに異ならぬ城中死傷の者數を知ず該城仝にも落されやせんと安き心ハあらざりけるとぞ信長隊て心に惟る様ハ先當般三好を退治課せバ該機を外さぬ本願寺に押寄一時に攻詰打入ときハ年來惡く思ふ門徒坊主生首看ん綽該時に有と竊に仝心づ四への下令せられる然バ秘すれ共顯るハ莫と織田方の士卒乃中にも一向真宗信心乃者止事を得ず役ふ把れ陣中に居的數多あれバ大将の密謀漏聽ふり南無三御門主乃御身の大事御知せ稟さで在べらぬと内密にて石山に馳行大将信長箇様々々乃心組ハ御油断あるかと告知せるる上人始め下間以下大きに驚き騒ぎ立て偖こそ鈴木重幸云ふに違ず信長の進発両端の軍略三好誅伐の勢に乗て當山攻潰さんの内心らの准備るくてハ不意打れんと羽檄と飛して在々國々渇仰無二の門下を召寄先第一に紀州雑賀ふ

鈴木源左エ門重辛（家執下間少進仲之）重辛招請の使命を傳へ重辛を誘引歸るべしと上人自ら御書を認め給ひ少進委細を領美かして御消息を懐中に收め從者僅に三個を引卒紀の路をさして急ぎ帰る斯て九月十二日の夜半刻隊を合圖の早鐘を撞頻と高く撞鳴しけるに近郷近在の門徒是を聽り須臾本山に緯こを起りぬ駈着御用を勉めやと宗派の僧俗我もくと馳聚る緯群蟻の如く瞬く間に門徒の人數六方有餘寄集ひて各位組を定めて寺門を固め櫓を揚柵を結圍し大小の銃炮塀際に列べ今にも織田方攻來らば佛恩報謝に命を抛ち弥陀の利劍を頭に戴き怨敵退滅かさでやと信心獲得の金剛信に死を厭はざる他力の防禦敵兵遲しと俟うけとり偖も下間少進仲之は紀伊國藤白山の麓に住鈴木が閑居に尋ね行て上人の御消息を差出し信長襲討の密策有を告知せる的有に依て了事今手當に逮ぶに就貴君の入城軍配を仰ぐ冀処は高祖彎師の法脉退滅せざる様貴君の軍慮に預りたく片時も早く御同道して入城下さる様との御命せ委細は御書にと稟しけるに鈴木重辛御書押戴きつく披見早りて稟しけるは誠に上人御憑の一條宗門興廢の期際に候ふ野拙躬に應ぜ大任なれば軍配を執緯分に過べし聊兵書を暗讀と雖も未だ兵士を使ひ緯なく凭る鄙境に下居なれば所謂井蛙の世情に度らず殊に一宗浮沈の軍事上人の御躬に抱る大事なれば一言一指人命に逮ぶ空と仮任に進み難く深く辭退すべきの処に候ふ然はあれど嚮に稟し上る詞も有法脉法燈に抱る難事

佛敵と看て募す時ハ看すく一宗滅亡せらるとて高祖の御廟前へ分解な
し是亦其深く歎く怒之依て嗚呼がましく尊命に應じ入城准備仕るべ
く候ふ宜く執達希ふにこそと云ば仲之大きに欣悦して速の許諾其
に於も那らり以太辱く存ずる然ば御同伴給はれと望む重幸答へて稟
しけるハ其同姓の一族四五個あり是們も談合召伴侶んと欲ふ足下先
に歸城ありて上人の御心慰め給はるべし其不日に啓行仕るべし決して
遲滯致さまじと入城の日限を相約して少進仲之ハ今翌日早朝鈴木
が許を暇を乞ひて道を急ぎて歸城かゝる（人數一千人楯篭る処を尤て城と
城と茲ハ鈴木重幸が一族に鈴木孫市郎良固と云る的あり武勇絶倫の雄
士くしぐ當國雑賀に野武士の輩凡五百人と集めて首長とあり一揆を

做て勢ひを震へり時に重幸本願寺の招きにより味方に參らゝ
告にゝとバ孫市彼五百人の野武士を引率藤白に來りて重幸に屬
せ今外の一族にハ志摩与四郎雑賀三緘入道岡嵜三郎太夫土橋平次
河嶋水之助天屋吉藏鈴木一楠渡部藤左エ門尉的場源七等其上根來
法師岩室清祐催促に応じ馳集る総勢凡二万餘人藤白にて一同勢揃へ
とゝ同月十五日石山に參着せ然バ顕如上人と始めとして一山の門
徒們勇ミ悦び哀ま信長の軍勢來れらゝ花々敷軍を做て東國武士
の睡りを覚させんと腕を按りて俟設け居る偖亦野田福嶌の新城に
三好康長入道笑岩同く義久入道鈎閑中村新兵衛高久同く舎弟新
助高之篠原玄蕃頭全清三人衆の勇士們までも能防戰して屈せざ

顕如上人
下間仲之を
使者と
して
重幸を
招ぬる
図
前
鈴木重幸

下間仲之

れバ容易落城すべくも看へぞ然るに此頃霖雨日を重ね十日余も降
續きけるバ河々の出水岸より高く織田の陣々出水に浸され士卒に
命じて土俵を作らせ是を層ねて堤を築き専ら洪水の防ぎに懸り
ければ是が爲に合戰も止まり雨の晴るを俟居たりけり時に石山の城中
に於ては鈴木源左エ門重幸ハ上人の御前に出て言上する樣頃日打續
きたる霖雨に天滿の杜ふ屯營るを織田乃本陣水に困み土俵を以て堤
を修復し三好と軍を止り居たる某間者を入て聴与に聽兩軍蛤相
爭へば鵜費に乘某機に臨みて一計施し織田の大軍に泥水を喰ワ
信長乃慢心を拉がんと存るゝ免許給ワんやと伺へば上人制めて曰ふ樣
ハ信長軍兵を出し攻來りるバ止事を得ず防戰すべし此方より

士卒を指向敵を欺謀討んの緯ハ僧形の躬に於ては爲べきに非ず信長より攻
寄るを待て計略施し給へと曰ひ乃る重幸感じて亦稟しけるハ佛心の思
し召有難く太尊し併今戰國五濁惡世の人心僞策欺說を以て利とす
る時節況や兵亂生死を爭ふ人命及下に屠るの巷に兵ハ僞道に用ゆ
以て大敵も能敗るに到る目前の利を棄るぞ勿らん合戰停て降參に如
ず信長不道にして偏執深く我宗門を潰さんとるを怨敵之上人手を
束ねて仕懸を待唯防戰を而已臨み給ず宗旨退轉を招くに等く佛心
礼謙の道も尓人に有法逆佛敵の織田信長討平げんに斟酌あらんや
先んぜる則ハ人を征せ先んぜらるる則ハ人に征せらる該理を御賢考有
まやうと言舌爽に禀され給へ上人道理に感伏し給ひ然有ハ如

何様とも軍師に任さん宜に計略憑こ入と有鈴木重幸畏りて御前を退き偖摂津國の門徒の裡より農民計りを五百人選出しこに酒肴菓子の類ひとゞび賜く齎し遣りて委くこの心策を示し教へて信長の本陣へと到らしむ亦別に兵船二十艘を仕立銃炮數百挺を用意せしめ船毎に隊将一個宛と軍卒五十人を乗しめ是亦同く籌策を授け夜に入て打立しめたり余魁長さるに誰々なれば鈴木孫市志摩与四郎野里三右衛門藤井太郎右衛門今井權七の五個こ鈴木重幸の謀略を領諾し兩夜を便りに竊び出たり

○偽計の農民織田の陣に入込并に鈴木孫市們夜襲を仕懸る

偖も織田方の陣中には降續きたる霖雨に洪水を防ぐの外に軍戰の手段にも到て上下殆ど退屈せし処へ彼本願寺の門徒乃農民恐る色なく陣へ行つて俺們に近郷近村の農夫に候ふ近曾三好の一黨亂を起し當國一般合戰の街と成俺們耕作を妨げらるゝ命の縄乃田畠を踏暴され迷惑困窮云様もあらぬ然るに織田殿様の武威を以て三好を攻させ給ふにより最早鼓腹乃泰代遠うるまゝと農民一統御勝軍を祈り御武運長久を賀し奉る爲鹿抹の鄙品に候へども御陣見舞の印として目録通り献上し奉ると件乃品々山乃如く積累ね實意を看せて差出しなれば信長此上なく感悦ありて農民們を目通りへ召し汝們予を祝迎太奇特なれ予頓て四海を切鎮め安堵に農事を營まむべし今姑くの艱苦を忍へよ見舞の参陣祝着せりと一統御讃の詞下りけるに農民們

い信長の形相佛敵ながらも威勢に恐れて思ひぞ拜伏して畏縮なるぬ
則ち御褒美として鳥目とび一統（百貫恵と賜ひ）とりや先て僉々御前
と下りけるぶ陣中にい洪水を禦んとて土俵を作り堤を築き士卒們忙ハ
しく奔り罵り何の差別もなく看へにそれば農民們士卒に云様（吾輩
們信長様への御恩報じに土俵乃手傳ひ仕つらん速に土堤と成就なるし
むべし素より吾輩土地乃農民にて候へば洪水乃押へ口能存じて候ふ
彼方の曲所い水勢激しく丈夫に堰せざれば頽流るべし此方の湾洞
い水澱みて緩くるせ杭而已みて緯足なんなど衆口に罵りて欺計つ手
々に土と運び土俵と層ね息とも継ぎ築く程に平日に手馴し土仕業
ゆへ雑兵們の働きよりい十倍の果敢把速それば諸方の土堤悉く成就す

依之陣中乃雑卒們力と勞せぞ大きに歓び思はぬ余方們働きにより
早速土堤も成就なるして陣中一統に幸甚と得とり迎もの緯に相濟へく
い汝們両中の間茲に滞留して土堤一條引請呉まじく哉余功績の程
い我輩より上へ宜く披露に逮びて御恩賞有やう執成へるぞ下郎の
癖乃身勝手より詞と飾りて憑みけるぶ甘味欺計んと思ふ農民們望み
の坪へ閃りけりと銘々心に打歓つ誠しやらに咎へて云やう何ゲ偖信長
様の御爲なるぶい如何様なる御用にもあと爭違背と禀すべきや修理圓
い我輩們に御任せ有バ修補仕るべしとて數多の農民部分とるし猶
も土堤の修造とるとに両氣の天い晴ざりにより織田の兵卒們い心と
緩め石山方の謀兵とい夢にも知ず土地の住民助勢と云に此二も疑なと

安心〜て霖雨の欝湿發散せんと或ひい酒宴に吹擂めら〜或ひい謡ひ舞
奏と行或ひい圍碁雙六博奕に戯れ金思ひくに樂みけるが時に元亀
元年九月十五日の綷之已に其夜も巳三つ刻分兵士們金鎧兜を枕と
前後も知ぞ卧さりけるが時分いろ〜と門徒の農民合圖の狼煙を上に
るるが此処彼処に分れ散る農民們築上〜土堤の土砂と鋤鍬持て切
くづ〜廻るに弥が上に泪む洪水の切所の條に溢れ入綷水瓶の割目に
異ならぞ忽ち織田方の陣中へ巨濤打て込入るるにぞ小水勢のすさま
じき綷恐怖なんども愚べけり唯看る一圓の湖水とい寝〜ぐり寝耳
に水の織田の軍勢ヤソレ云間も有ばこそ簀も浸る水の中鎧兜も濡打
扮に是い冷とやと裸武者で城と乗取る望も失て只管助け舩の一番乗

を願ひるる的無りるれど急に舩筏の手當いるく喚叫ぶ声水勢の音恰
ら地獄道の苦患の様も思ひ比較て物すごりけり然い水の爲に溺れ死
る兵忽ち小數三百余人死骸も知ぞ押流されり信長も該大寝に驚
給ひ馬上ふて陣外に馳出〜小高き丘に馳登りて辛く洪水を除給ひ
るるが今宵ハ長月望夜るれ共天い雨雲張詰されば〜ら雨に曇も深く
四方の黒白も分ざりるる偖も狼烟の上るを合圖と〜て石山方の勇
士の人々鈴木孫市郎を始め〜て志摩藤井今井野里の輩二十艘の
兵舩と漕立ハ方より本陣を押圍〜鯨波を上銃炮を放ち懸水に困む
織田方の中へ筒先揃へて撃込〜ば的と成て水中に倒れ死を的矢庭
に三十余個の死亡とや該外兵舩に近着敵ハ雑立斬立打捲りるれば

水に暴肝把れ〜織田勢續いて不意の夜襲を受け泣頬蜂が刺譬の如く臆病風に搦とふ〻ん防ぎ支ゆる兵もなく散々に打破れて敗走〜四方八方へ道れ行に雨中の朧夜水軍なれバ双方敵の多少も分らぬ固より織田の勇兵們も心い矢猛に逸ると雖も總軍敵の術中に陷り七烈八摧に打崩されて深水の底に落込つ溺れ死を的數を知を時に織田の勇臣柴田勝家ハ主君の御動座分らされい驚乎一大事と慌忙き楯の板と筏に組ゐ〜長柄の鎗を械とゐ〜て本陣目掛て押行処へ石山方の志摩与四郎ゞ船乗組五十人の兵之と見咎め銃炮の筒先揃へて撃發つ鐵丸一玉柴田ゞ臂とゐそり遥彼方へ飛散にゐり勝家些〻く薄痍と負〜ゞ該時大きに憤怒と發〜惡き青蠅們の手向ひ哉織田の御内の四天王とゐる徒名鬼柴田と呼ゐ者ぞ俺本事の程を試ゐよやと云も敢ぞ腹巻引メて水中へ飛乱離と躍り入船に掌を懸一喝喚き一覆に刎轉〜げ廻ぶ〜もの多勢も一度に斗負芋の如くに水ゐ墮入甲冑に躬を固むれハ水に漬りて重も強く僉々泥水多く呑て半死半生に押流れゐり大将与四郎も諸共に水中へ打閃りけ廻ども能水練に馴ゐり〜ゐバ逸く味方の兵船に游ぎ着つ危き命を助ゐりにゐり打覆され〜尓兵船ハ低きゐる儘沉〻入に雨風艮ゐり吹立々れバ大満の土地ハ低見ゐるゆ〻倍々水嵩弥増りて澱中津乃溢も水にて重疊陸八尺の出水と成人家ハ大半壊れ溢れ流る〜誠に近代未曽有の洪水と今年正月三日西北の天に彗星出現〜給ひゐるハ斯る水難戰亂の起れ

る偏に世の凶兆と示し給ふべ已に今夜も明近く成東雲漸く白ふて
看へにくれば鈴木志摩の輩指揮とあり〜兵船共を一所に纒め奇兵を
以て敵を討ハ三好が夜襲と思ハせん爲故意勝閧を作ぜ引と看ぜぞ僉
々竊に道をとゝめ石山本願寺へ引取々る重幸天災地妖の時に乗て神
機妙案の工夫を設け織田の大軍許多損ひ出没躱〜て歸城ゆさしむ
上人始め下間以下介妙策に感伏ゆ〜て宗門興運の孔明べとて一同尊
敬〜て歡びゝる信長ハ一騎ゆて本陣を駈出〜小高き丘に馳上らるゝ
南無妙法蓮華經の旗押立させ辛く洪水を除給ひけるゞ味方の損亡
大方ゆらぜ三好黨の夜襲せ〜体にも看へぜ何様是ハ魔道の処爲ゝ
鬼神の障碍ふ有んぞゝんとて頓に石山乃手策と知給ハざり〜時に柴

田勝家旗を看止め主君の御馬前に蒐來りて大息継て言上まゝ様ハ
甚直様御本營に馳參る処敵方の軍船に支らゝ此く臂を撃ゆ〜れ
〜ら共矢庭に舷ふ両手を懸真逆さぬに打覆〜て雑兵両個を生虜て候へ
ハ那方の手に屬ぬる者ぞと嚴く拷問致せ〜処に俺輩ハ三好勢の雑卒に
非ぜ石山本願寺門徒のゝ〜軍師鈴木重幸の指揮に依て出水を便りに
亂入の次第逐一首狀に逮びて候ふ然まれば終夜の一騒動ハ生真坊主の
機関仕事以の外の狼藉に候へ早々御征伐然るべ〜と告信長聞〜召て
曰ふ様如法にもゆき坊主の亂妨偖ハ三好が黨に合躰〜武將の軍に敵對
上ハ朝敵逆賊とも謂つべき者ゝ這上ハ些も用捨すべからぞと俄に諸老
臣を呼聚めらゝ石山討手の軍議に逮ぶ〜信長左右を顧ゝ給ひて昨

日近郷の農民くとて進物携へ陣中へ來り〜者土築の手傳請込とる
る〜尒的們陣中に残り居や探索せよと差令有〜べ福富平左工門
不破河内守畏つて陣の内外を蒐廻り呼立々々尋ねけれども容へ愚簑
笠までも何処へ躱れ引水ともに行方知ぎ落失々れべ主君へ該由言上に
逮ぶ信長切齒〜て悔を給ひ原來渠奴們石山の間諜よ共曉ぎ〜て飯に
飼を術計に陷りとることを無念〜最早一日も遲滯〜難〜俺総軍を二手
に分ち一手へ柴田勝家を隊將とて三好ぶ野田福嶌の新城を攻ませ信
長自ら一手を率〜て石山に向て攻詰べ〜とそ既に部署を下令有処に
津村渡邊に宿陣せ〜摂津勢追々注進〜て稟〜る様へ豫て石山を
押への爲とて築き置々川分口城へ石山より常樂寺を稟ぎ坊主隊將

とて尒勢三千計り四面把圍んで攻立候ふ亦簑の岸の砦へ向ふ順
興寺を稟ぎ隊將とて是も軍兵三千計り同時に押寄鯨波を作り
唯今合戰真最中に候ふ早々御加勢下さるべ〜と引も斷ぎ告に々き
べ信長愈驚き給ひ両所の砦へ殊に要地〜後詰の兵を出すべ〜とそ前
田亦左工門利家佐久間右工門尉信盛丹羽五郎左工門尉長秀林佐渡
守秀成に一萬余騎の援兵を与へ両砦の援助に出〜給へり

○鈴木重幸敵の本陣天王寺を劫ぎ并光秀敗兵を集めて主君を救ふ

借川分口の砦に於ては平手監物政義佐々内藏助成政佐藤六左工門信
政塚本小大膳等千三百餘人簑り衛る石山勢の三千余人犇々と押
寄せ鳥銃纔べ打に放ち懸柵を倒〜鹿角木を破り念佛一致の死勇に

乗〳〵無二無三にぞ攻〳〵りける守護の隊将佐々成政へ素より大膳不敵の勇兵なれば噫嚢や門徒の啄入輩武士に向て槍突んとへ躬の程知ぬ暴鼠の地獄陥〳〵に罹る如〳〵猫の摂待望むべきならば去塵に倣て呉んと城兵五百人を引別て塚本小大膳と諸俱に城門颯と押開うせて群り寄る門徒勢へ暴風に列る雨の如く横目も振せず突て入巴の字十文字に斬捲れば〳〵も勇を〳〵寄手の門徒們隊伍素けて進み難く半町許り引退く此方の隊将常樂寺米配揮つて味方を励〳〵噫云甲斐もあき的們りる多寡の知らる砦の援兵鳥銃にて撃縮ませうや痿む処へ鑓を入やと大音放て指揮をすれ〳〵三百余りの鳥銃組筒先揃て脚蹈〳〵め八方一時に火蓋を切べ先に進み〳〵城兵百餘人将棊倒れふ

打轉ふ惜ひ哉塚本小大膳へ此時鋲丸に撃當られて川分口の戦場に陣死を成政看るゝ大きに怒り一々芋刺にせん覚悟せよと三尺有余の大刄の鎗をうつくと打〳〵ぐきつ雷電晃く如く飛懸つて瞬く間もなふ敵十五六騎算を亂して刺伏々まべ城兵是に力を得て踏込々々戦ふ程に憤激突戦時迄しける偖亦竜の岸の砦へ順興寺三千余騎にて押寄つ楯竹束を衝列べ曳々声を放つて攻寄る該城将へ稲葉伊豫守一徹齋入道老練五調の勇士なれば塀の狭間に鳥銃を懸双べ敵兵を矢頃に引寄つ撞地一同に撃出して炮烟立昇る中より〳〵て城門開き て切て出つ一捲り捲り立てへ颯と曳上亦鳥銃にて撃ち〳〵〳〵二時計揉合々れ共更に勝負へ着ざりける這時信長より援詰の勢前田佐久間

丹羽林等二万余騎を二隊に分川分口と篭の岸に双方苛に苛てぞ押
來り揉合寄手の後ろ関を作つて斬て懸れば城中ゑりも打て出で差
狭んで斬結ぶにぞ石山勢散々に討なされ兩城共に圍まれ解き石山
さ〳〵て引除処と道さ〳〵遣じと織田の大軍隊と乱〳〵て七八町計り後
に續きて追懸行に思も寄ぬ一色の鳥銃横方の葭原ゑり響くと等
く間近き森の裡ゑり〳〵て南無不可思議光如來と記〳〵る九字の大
旗五十流と翻々と風に靡〳〵て數万騎の石山勢顕れ出関と作つて後を
塞ぎ數百の鳥銃聯發〳〵て一時に微塵にせんと支へとゑり織田方の諸將
是を看るゑり偖ハ石山方の援兵なるぞ一淡吹せて蹴散せとて追軍に
馴る勇士們前田佐久間丹羽林稲葉佐々の衆人なれば忽ち隊伍と三

段に分ち前後に當つて左右に突立喚き叫んで打戰へハ石山勢も声々
に罵り佛敵信長荷擔の奴原弥陀の利劔で殺〳〵て呉ん一々観念〳〵て
往生遂ゑうと御勸め聽込衆兵なれば討も討るも報恩謝德極樂まゐりの
一の高名九品蓮臺乗込仕事と信心堅ゐる門徒なれば刺ども斬ども厭
ばこそ入亂れてぞ戰ひなれば兩軍の手負死人數を知ぞ這時既ふ晩な
に近く亦も雨降道滑りければ戰爭も早是まぢとて北と東へ相引ふ
立別れ兩城へも以前の如く歸陣なゆ〳〵ぬ斯り〳〵程に援詰の兵士ハ信長
の本陣に立歸りて詳に軍の次第言上〳〵 塚本小大膳銃丸に當らま
陣死の由を演ひ〳〵べば信長愈憤り強くて然ば先本願寺を攻亡〳〵て
而〳〵て后三好を征伐せんと二萬余騎を柴田に分ちて野田福嶌の三

好に當らしめ自ら四万余騎の大軍を率ゐ元亀元年九月十八日中津川の船橋を押渡り柴嶌の邊より川を距て野江鴫野より今里を過猪飼野より岡村に出天王寺にぞ着陣し給ひ偖該地に於て石山攻の手配をば定めらるるや抑這石山の地形と謂へば西は漫々たる大海にして潮濤渡邊大江の岸を洗ひ人馬の往來勞なく北は澱川の大流南西に横たはり六國（近江丹波山城大和河内摂津）の水歸會せる咽喉之東には大沼有て數里に蔓延し大和川合間を廻流す翼なくて近寄がたく南一方は平地にして石山往來の正面と せり該謂に信長北手の方なる天満の森（今の天満宮社地なりしの本陣より東北の方へ大廻りをなして東の方より坤へ進向ひ天王寺に軍勢を押廻し石山の正面より攻寄んとを天下第一の要害と知召て蓮如

上人軍は望み給ひぬと雖も念佛宗門繁榮の爲聖德皇太子の靈告に隨ひ城州山科の御坊を茲に移轉まゐらせ倍々宗風盛大の勝地なり信長之を城地に望むは土地に三德を具るゆへ余先一を如何と謂へば上洛往來に便利なる京都守護にも通じ宜く倘くは叛反の朝臣有て天子を迎へ奪ひんと謀らば該地へ御動座を勸めて警衛なをにも進退利あり二には四夷を征せる出入にも海濱運送太速へ三には土地は日本の咽喉なれば之に據て篭居するには糧米多分に貯へ置べし軍事の利益最究竟茲に勝れる地処有べからずと豫て見積り置れしとや去程に織田方の先鋒には池田勝三郎信輝林佐渡守秀成福富平左エ門正清野々村三十郎高經湯浅甚助助俊井上戈助等一万五千余人次第を守て

連行て本願寺大手柵際に先鋒直々と押寄て関の声天地を動し軍勢潮の涌轉るが如し時に城中の軍兵們は一向に関の声を併もせず静り返つて居たりけるが軍師重幸は櫓に登りて寄手矢頃に成るを看て須社よと指揮とかせば塀の狭間櫓々に拽双べる大小の鳥銃筒先揃て撞地放せば響につきて倒る武者は将棊倒しに壊れ伏て陣脚乱れて半町許り踉巡りに退きたりけるを重幸看るより指揮とかして時分は今ぞ打て出よと軍師の命に鈴木孫市門徒の逞兵六百余人前後ふ引具し門押開き関を作つて突入つ得物々々を振電して斬立薙立當るに任せ縦横無盡に暴廻れば寄手の大軍左右へ進まぞ猛威に壁して踵を復し四五町後へと崩れ引を孫市逃るを追捨て輕々と勢を

引揚て門を鎖して守り居る先鋒初敗無念とて信長殊に怒り強く後陣の隊を繰出し自ら真先に駒乗出し采配拿て味方を進め唯一操にと攻詰給ふ這手に進める軍将には前田又左エ門利家明智十兵衛光秀佐久間右エ門尉信盛森三左エ門可成丹羽五郎左エ門長秀氏家常陸入道卜全伊賀伊賀守光俊等二万五千余騎の勇兵大将の軍配に励まされ持楯竹束を被きつゝ吏々声を合して攻寄る余勢破竹の如き鋭氣ふ今もや這構隨入んと看へて宗流渇仰の徒は唯御門主を思ひて涙を落しぬ這時紅日西天に沈み玉兎まぐ出ぞ宵暗みまぐ合戦は翌日と定めつゝ攻口を二町計り引退き篝火夥しく焚列ね軍威を示して遠巻なを已に初更の刻をひと思ふに石山より一声の狼烟を上

重幸の軍配
信長平野郷
ゟ再び
敗走ふる
図
前田利家
森可成

信長

く雲ふ霧霧て看へくるがあ〜不審四方遠近とかく釣鐘乱調に撞鳴て関の声八方に響き度り太凄まじく聞へくるぶ織田方の軍兵僉仰天〜是ハ乍麼奈何と周章〜て四方と屹と打瞻むれば岡村の丘乃邊より〜て數千の松明を灯し列れ勢の多少ハ分らざるども雲霞の如く起り出て東門口より噇と込入織田勢の本陣と望んで箭と飛〜鳥銃と放ち喚き叫んで暴入とり是ハ軍師鈴木重幸が指揮と受真宗寺と亀井六郎と兩将と〜二千余人乃門徒們と卒〜丘（後世此処をヨカチ山と云）の樹林に埋伏せ〜め狼烟を以て合號と定め敵の本陣後と襲撃ま信長是を看て嘲ら笑ひ小賢〜き土ぼぜりの挙止る坊主の肩持一揆の奴原何程の綽や仕出すべき餘さぞ漏さぞ斬て棄ると烈〜く下令ある間も有せを續ひて駈來る門徒の二番隊石山末寺に荒法師と呼れ〜端の坊報恩寺善福寺蓮生寺と始めと〜て在俗の侍士に鈴木孫市郎山名内記三林周防守高松三之丞下間右近等一萬余人の大兵と引卒〜鬨声江海灣濆と動揺し織田の本陣真二に突破り當ると幸ひに斬て廻る後ろ〜に真宗寺に亀井六郎鳥銃と飛ま綽暴雨の如く僉邑々に詈呼ひて曰く彎師の法燈未廣と妬ま佛敵法敵と成織田信長打平ぐるぶ殺多生後生知ぶの能看懲〜め看止次第にさ〜違へくるや夫社素懐の大往生ぞと呼ちり〜く斬立ぐるぶ大軍の織田勢ぶれども不意乃夜襲と前後に引受頻に進退すべき様ぶく總軍狼狽噪ぎ廻れば得さらと突込石山勢ハ杣と入とる舎屋の如く人馬将卒の差別もぶく暴に暴て

を斬立けるに死傷の士卒累々と〳〵て陣死の人數夥しけるぞ大将信長も協つゞと思ひ〳〵て旗下の兵を引屬ひ坤をさ〳〵て道を出給ふ相從へる軍將には前田又左エ門森三左エ門士卒の輩三千には過ぎ夜も早亥の刻に成ぬるに十八日の玉兎東天に澄上り秋風肌を徹〳〵て吹荒ぶ招く尾花も敵兵の伏勢ふもやと疑ひ道をとゞめて立退るに木津今宮の間に〳〵て亦もや思ひ懸なく関を作りて九字の大旗月影に翻し石山方の諸勇士なるゆ神田土佐相良長門益田六郎兵衛等四千余人の逞兵を引卒し信長の中陣を目懸て鳥銃數百挺撃放ちつ横鎗入て突崩されば信長倍々驚き給ひ打狭まるとは道も難〳〵と駒に鞭打て駈出し給ひ主君の先途を看遂んと云忠義の士卒も迯途索め大概八方に散亂かして君を暴ふ兵二百人に足す処々に防戦盡し居ん僅の隨兵にて迯られぬる那方に伏兵有とも知ねば故意路もなき田畑の中を横斜に駈給ひなるゆ乍麼何處へか落往ぬやと前向の方を看給ひ〳〵遥に人家の一村二村狭霧の間に見られなるぞ是なん勝間の里なるらんと駒をとゞめて志〳〵給ふに茲にも門徒の兵や置けん松明の光り行違ひ多人數屯集の様看給ひ〳〵信長猶も恐怖給ひ駒振向せて東に駈させ東成郡平野郷へ迯給ふ茲には伏兵も有さるべしと大念佛寺に入て住僧を憑み先腰兵粮を遣ひ飢を助け少選息を繼ぐ〳〵処に實や重幸う遠謀脱漏なく信長敗走に逮ふ時は本陣四方五六里の在村立寄さる処有べらんと一味の門徒へ羽檄を飛〳〵て織田方と看

べ將卒選ハせ把囲こて討把へ〜と攝河泉の近郷近在の殘せ門徒へ言渡しけるに平野郷民們も織田と視るより石山より〜て分配あ〜置屯集乃兵士へ知せ々るに一色の鳥銃放ちて合號と〜鬨を作つて數多乃軍兵大念佛寺と追把囲こ佛敵信長と視るに僻目ゟ石山の軍將栗津右近く最早遁れぬ佛罰應報観念〜て首級を進与と呼りつ〜一度に寺内に込入て我討把んと閃きるれば織田の勇臣前田利家森可成の兩個向ふに立塞り匹夫下郎の身も顧ず非礼ふも亂入るを綽奇怪く一々今世の暇と把せん得手乃念佛唱へるやと玉散大太刀真向に挿〜群り進む敵の中へ嗜り叫て斬て入陸離々々と打倦るに今彊勇八一對乃手練右と左へ斬倒さるもの即座に三十餘人討れるもの逸雄の門徒勢

も兩個乃働きに辟易〜て逃命の惜くや有けん是や恢いぬと頭を抱へ潑と一同に逃出〜ける這間に前田森の兩勇士信長を供奉〜て參らせ南方きれ村さ〜て馳々る処西方田邊中野の辺ゟり九一萬餘りの軍兵月明りに松明も灯さを此處へ押來る形勢信長御覧〜て嘆息〜給ひ本願寺坊主乃爲に信長乃武運も盡〜と覚ゆ汝們防箭〜て敵と支へよ予心静に屠腹せんと曰ふ兩臣色一様に留めて曰く是ハ君に似合ぬ御錠に候へ昔周の文王難叢棘ふ困こ食を得さる綽三日と有り聖人と雖も災厄艱苦と嘗む而〜て後天下一統乃功せり君今僅の敵軍に襲つも日來の英武強膽にも似ず千金の御命を過さんと仕給ふ〜天魔に魅らも給ふと覚へり迷問有へき時節に非ず疾々道を索め

て落させ給へと勧め諫めて引立々々べば信長實もと御心把直さと行向の方へ馳んと〜給ふ然るに近着軍勢寂者れば真先に立とる旗の紋所へ水色に桔梗と深付とり是敵にあらで味方の一将明智十兵衛光秀〻〻り光秀敗軍の兵と集め主君の御在地と尋ね需め天王寺近郷探し来る処をれば信長是と看給ふ〻り九死一生と得る御心地して御歓びの声と發し給ひ光秀の〜〜も参り〜るふ信長是に在と仰せ〻〻べば光秀馬より飛下りて主君の御安體と屢賀び諸軍と倶に万歳と唱へ森前田にも互に無事と祝し右左なを裡長き夜も暁近き天と成て大念佛寺の鐘響き度る追々敗兵聚り来りて遂に元の如く大軍と成石山勢も十分勝軍と〜て勇んで衆々帰城か〜る徒

信長にも諸軍と纏め不日に石山に把詰て這欝憤と晴〜て呉んと愈怨憎の心火と焦され河内路と經て西成郡に出中島に本陣と移されるる